

社会情報調査の方法に関する研究会 第7回 (1996年11月7日実施)

メディアと権力

— その内在的関係をめぐって —

亘 明志

1. はじめに
2. 古典的な「メディアと権力」論の枠組みの問題点
3. フーコーの微視的権力の理論とその影響
4. 諸メディアの重層的構成
5. レヴィ=ストロースによる文字の権力性の指摘
6. 識字のなかの権力問題
7. 出版資本主義・想像の共同体・ナショナリズム
8. 超パノプティコンとしてのデータベース
9. パノプティコン型の権力の行方
10. ボードリヤールのハイパーリアル論
11. 「送り手と受け手」図式の失効
12. おわりに

1. はじめに

今日、報告しようと思っているのはレジューメ(資料参照)にありますように「メディアと権力」という非常に抽象的で広範なテーマですので一応それを限定するために「その内在的関係をめぐって」とサブタイトルを添えてみました。これでもまだちょっと漠然としているかもしれません。

内容としては、岩波書店から『現代社会学講座』というシリーズがただいま出ていまして、今年1996年の前半にそこに自分の関心との重なり合うところで三編程論文を書かせていただいたんです。それらは身体に関するもの、メディア関係のもの、そして権力関係のもの三つなんです。これは私が社会理論を考える時に、最初に「個人と社会」というような大きな枠組みを立てるのではなくて、身体・メディア・権力などのテーマから物事を

考えていく、特にメディア論を基盤にした文化社会学とか社会理論というものを考えていくスタンスをとっていることを現しています。今回の報告はそのうち『メディアと情報化の社会学』に収録の「メディアと権力」という論文の内容に即しています。

最近ではカルチュラル・スタディーズとかポストコロニアリズムという考え方が社会学の中で出ています。これまでのメディア論のようにメディアの影響といった問題を考えるだけではなくて、権力の問題とか、歴史的な視点とかそういったものを取り入れていこうという傾向が見られます。そうした考え方に直接触発されてというわけではないのですが、そうした問題意識を多少は念頭に置いて考えています。そういったことを基にして、今年前半は締切に追われながら論文を書いたんですけれども、どうしても不十分な点、書き切れなかった点がありまして、その後、改め

て展開したいことがいろいろと残っています。本当はそういう新しいテーマについて新しい展開を報告するのが良かったし、そうしたかったんですけども、今年の後半になって雑用に追われる状態になりまして、なかなかそれがまとまり切らないので、一応、今回の報告はその中心になるメディアに関して書いた論文を軸に報告したいと考えているだけです。

その論文「メディアと権力」についてはすでにコピーが渡っているようですし、このレジュメが大体それに沿って書いてあります。ですから論文を読んで下されば、大体その内容は分かっていただけだと思うんですが、論文には書いていない部分や背景の問題などについていくつか織り込んだり、これから考えたいと思っていることも含めて、お話ししたいと思います。

それと、社会学が専門の先生方ばかりではないそうなので、社会学に関して当然「何故そういう事が問題になるのだろう」と思われる部分も出てくると思われます。それらについては「何故それが社会学の中で問題になるのか」という点もお話ししたいと思います。

この「メディアと権力」論文のベースになったのは、四、五年前から進められた文部省の科学研究費の重点領域研究で「情報化社会と人間」というかなり大きなテーマのプロジェクトです。この研究に関わる全部の研究者、参加した研究者は200人くらいもいたと思います。それは社会学だけではなくて法律学とか経済学とか様々な分野の研究者から成っています。人文社会系が中心です。そういう人達を中心になって情報化社会を人間の視点から捉えていくとどう捉えられるのかという各個別のテーマで研究しています。全貌は規模が大きいので私もよく掴めないくらいなんですけれどもこれが大きく5群に分かれていて、私はそのうち「情報化社会と文化変容」というテーマの5群に入っていました。

その中で私が担当したのは特に「情報化と消費社会」という個別テーマでした。その研究の過程で何度かグループで集まって打合せをしたり、研究発表をした時に「情報化」なる言葉やあるいはそれが対象とする社会領域に距離を感じてしまう人達が大半だったと思うんですね。ただ、そうは言ってもそれをどんなふうに自分の問題関心の所に引き寄せていくのかといったところから研究は出発したと思います。こちらが例えば芸術とか、宗教とかいったときに持っている具体的なりアリティからみると「情報化」という言葉が指す問題領域がどうしても平板に見えてくる。そのギャップをどうするのかというのがまず大きな問題でした。

そこで議論される時には単に情報化が具体的にはどんな影響を与えるのか、社会を変容していくのかというテーマだけではなくて、どういう制度の問題なのか？そこで働いている権力関係みたいなものは何なのか？そういったテーマはどうしても必要である、だから中心になるメディア論を踏まえた権力関係論というのが不可欠になってくるという認識が徐々に形成されてきたというか、少なくとも私の中ではそういった問題を避けられないということが背景にあった訳です。

2. 古典的な「メディアと権力」 論の枠組みの問題点

以上は前置きなんですけれども、そういうことでどうしても「メディアと権力」というテーマで研究を進めていきたいという意向はあったんです。ですが、いざ具体的に研究を進めて論文を書こうとすると問題の輪郭が非常に乱反射的に様々な方向に広がっていくので問題設定そのものを考え直さざるを得なくなりました。そこをまず具体的に問題を絞っていくところから始めたのです。その経緯が示されているのがこの論文の最初の「メディアの枠組みと権力関係」とある部分です。ここは

枚数の関係でかなり縮めた部分なんです。後から読んだ人に聞いてみると「分かりずらかった」という意見もありましたので今回はできるだけ整理してレジュメに書いてみたんですけれども。

「メディアと権力」という問題設定自体は従来からありました。そういうテーマの本も何冊も出ています。その場合には「メディアと権力」或いは「マスコミの権力」とか「メディアの権力」といった言い方もされています。その場合、メディアというものを独立した一つの実体としてみていて、メディアに関して権力を対立させるという図式がとられています。この場合に権力というのは概ね国家権力を指していることが多いようです。古典的にはそういう形でメディアにおける「言論の自由」とか「表現の自由」といったものを制約する権力、という対立図式を前提に考えられてきました。

ところが、現実の問題の現れはそこから徐々にずれ始めているということが起きています。マスメディア論の中ではマスメディア自体が一つの社会的な権力だと捉える必要がある。これを「第四の権力論」と言うこともあります。「第四の」というのは三権分立プラス、マスメディアあるいはマスコミという第四の権力があるという考え方ですね。これは一時、大衆社会論とか知識社会論が流行する下地として非常に影響力を持った考え方でした。

この「第四の権力論」の指摘自体は間違っ
てはいないと思うんですけれども、それを指摘したからどうなんだと、そこからどう
いう問題がさらに展開できるのかという点で
その後の展開力となると切れ味が落ちて
しまうのです。確かにそうした古典的な問
題自体は以前として残っていると思うん
ですけれども、そこで「メディア自体がも
う権力性を帯びている」というように最
初から決めつけた前提に立つのではなく、
またメディア自体を実体的

に捉えるのでもなくて、もう少しコミュニ
ケーションのプロセスの中で捉える必要
があるし、そのプロセスの中で働いてい
る内在的な権力関係みたいなものを捉
える必要があるんじゃないかというよう
な考え方が出てきたわけですね。この論
文では少なくともそういった方向で捉
えたかったんですね。

古典的な問題設定から出てくるのは恐
らくメディア或いはメディアの変容とい
うのは個人にどの様な影響を及ぼすの
か？ または個人はメディアによって何
を成し得るのか？ といったような問
題だろうと思うんですね。こうした問
題設定自体は社会学の最新の理論をや
っている人から見ると、ある意味では
「社会学の古典的な問題の焼き直しに
過ぎない」となります。例えば「個人
と社会の関係」というような議論は非
常に伝統的な社会学の問題であつた
わけですから、それを単にメディアとい
う変数を入れて焼き直しているだけ
である、といった批判もないわけでは
ない。

しかし、メディアというレベルで問題
を分析することは、何か新しい、例
えば「メディア」という変数を入れた
とか、新しい用語を使ったとか、そ
ういった「単なる焼き直し」では無
いと思っているんです。というのも、
剥き出しの社会と個人という大きな
枠組みだけで議論するのはどうしても
非常に問題を単純化してしまうし、
限界がある。むしろ重要なのはメ
ディアといったレベル——その他に
もさまざまなレベルの問題があると思
いますが——を捉えた時にそれをめぐ
って捉えられる社会関係とか権力関
係といったものを具体的に分析して
いく視点は非常に重要だし、それは
社会と個人に関する一般理論に還元
できるものでもない、ということです。
もちろんロジック自体はある意味で
共通の焼き直しと言われれば焼き直
しみたいな点もあるのかも知れませ
ん。けれどもそういう分析自体は決
して一般理論に還元できる問題では
ないと思っています。その場合にメ
ディアの概念自

体も変えて行かざるを得ないし、それから権力という概念自体も変えていかざるを得ない。ここで言いたいのは要するに「メディアに内在する権力の関係」というものを従来のメディアと権力に関する図式を排除するのではなしに、もっと別の観点から捉えてみたらどうなるのかということです。そこが出発点です。

3. フーコーの微視的権力の理論と その影響

そこで援用するのはフーコーという人の微視的な権力概念です。フーコーはすでに日本では権威になっていますから、そういうのをただ振りかざせばいいというものではないと思うんですけれども、ただ権力概念というものを少し精密に考えていく時にはフーコーが必要な部分がどうしても出てくるので、ここではあえて引き合いに出します。例えば、メディアがどのように権力の過程に組み込まれているのかと考える際にメディアを単なる技術と捉えた場合には価値中立的なものになってしまいます。けれども、そういう価値中立的な捉え方と逆にメディア自体が権力だという見方があります。「第四の権力論」がそうでしたね。そういう立場もあるんですが、どちらも問題を単純化しているというか実体化してしまっている。そうではなくてメディア自体が或るコミュニケーションプロセスの中にどのように組み込まれているのかという形で問題を捉えてみました。その中で権力性を帯びていたりそうでなかったりする。その権力関係というものがさまざまな展開をするんだと考えていくことができます。さらに問題となるのはメディアにおいて権力はどのように行使されているのかというようなことです。

では、具体的にどのように進めていくのか。これについてはまだ実際にそういう形で進めていった例があまり無いものですから、幾つか文献を参考にします。例えば「出発点自体

は近いな」と思ったのがタックマンという人の『ニュース社会学』という書物です。これはマスメディア論ではわりと有名な、よく知られている本です。送り手の分析でエスノメソドロジーの考え方をかなり取り入れてなされている研究でして、そこでの問題は「ニュースというのはどんなふう形成されていくのか」です。「かけひき」という言葉を使っています。「かけひき」を通じて一つの枠組みができていくんだということです。この枠組みが「フレーム」ですね。「フレーム」というのはこれまた社会学では非常に有名なゴッフマンという人のフレーム・アナリシスですね、これを恐らくタックマンは意識したんだろうと思います。

ゴッフマンのフレーム・アナリシスの考え方というのはそれ以前のゴッフマンによる行為の分析、例えば行為というものをある種の二重性として捉える方法に連なります。簡単に事例を引いてみますと、例えば私の同僚の話なんですけれども、社会学の授業でいつもある女子学生が前に座って講義を聞いている。それで非常に良く勉強しているんだろうと聞いていたんですね。それで、ある時その学生が研究室に来たんです。彼女は授業にも毎回出席して、一番前に座ってノートを一生懸命とっているのですが、話をしてみると社会学の内容については全く理解していない、話した事を何も覚えていないことがわかった。それでいて彼女は先生が喋る時にどんなふうか、例えば黒板に字を書く時にどんな姿勢で書くとか、どういう時に笑うとか、そういったことは非常によく観察していてよく覚えている。それしか覚えていないというか、それでがっかりしたという話を聞いたことがあるんです。つまり或る行為が他者に向けてプレゼンテーションされる際のその表示される部分とメッセージを伝える内容の部分とがあるという発想がゴッフマンの場合には一貫してある。

特にゴッフマンが関心を持つのはプレゼン

ーションです。すなわち、どんな行為でも別にその人は恰好をつけていろいろやっているわけじゃないんだけど、必ず或る一定の内容を伝える時にどんな表情、どんな声で伝えるか、どんな喋り方でどんな言葉を使うとか、そういったことが具体的にあるわけです。それが或る一つの、実質的な部分としてメッセージのフレームを作っていくんだということです。ゴッフマンを専門に研究している人からはクレームがつくかも知れませんが、基本的にそういう発想ですよ。

ただゴッフマンの場合、実際にコミュニケーションの場面でリアリティーが一瞬転換する場合があります。例えばゴッフマンが研究したスティグマという研究があります。スティグマを帯びている人の作る人間関係というものを見ていくと、スティグマを隠そうとする、パッシングつまりやり過ぎそうとする。それでそれがうまくいったり、失敗したりするわけですね。その時の人間関係の突然の変化みたいなもの。何がそれを変化させるのか？ という問題に非常に興味を持っているように思うんですね。

ところがこの『ニュース社会学』を書いたタックマンは、これはエスノメソドロジーとゴッフマンの違いだと思うんですけども、あるコミュニケーション過程というものの中でいかに解釈枠組みが作られていくのか、同じ相互行為、相手の行為であっても、例えば日常の挨拶なんかでも、それをどういうフレームの中で受け取るかによって全く様相は違ってくるといいます。そういった日常的な挨拶は文字通りの意味ではなくて、挨拶として受けとられなければそれは挨拶にはならない。いちいち「元気ですか」とか聞かれた時に「元気とはどういう意味ですか」というように、個々の意味を問い質す様なことをしていくとそういう枠組みは崩れていきます。そんな考え方が初期のエスノメソドロジーではあったようなんですね。

タックマンはその解釈枠組みというものがどんなふう形成されていくのかという問題意識からマスメディアを考えていく。とりわけ送り手についてです。ニュースを送る時に何がニュースとして選択されるのか、そういった問題を取り上げました。問題の次元はタックマンとはずれてくるんですが、そのアイデアというものは多少近いともいえる。そこでメディアとフレームの権力化という点を意識して、フレームという媒介項を置いてメディアと権力関係というものを考えていこうとしました。特に問題になってくるのはフレームにも制度的なものとか、そういうかなり大きな要素が入ってくることです。その辺をどのように取り入れていくのかという問題はあります。

4. 諸メディアの重層的構成

ではどのようにフレームの前提になる制度的なメディアというものを取り出していくのかということが問題となります。これは、従来のメディア論の中で大体「音声メディア」「文字メディア」「印刷メディア」、それからそれ以後の新しい「エレクトロニクスメディア」という四段階説にメディアを分類していたことと関わります。「音声」はそれ以後の「文字」とか「印刷」などをメディアとしてみる発想から事後的に「音声も一つのメディアであった」として捉えられたと思うんです。そういう常識がかなりあるのでそこをもう一度疑ってみようかなと思ったんです。

これら四つについて単に歴史的な流れとか並列しているとかいうのではなくて、一つの縦糸として権力関係というものをまず設定して、それを軸に見ていく。そういうふうと考えていくと「文字」と「印刷」というのはかなり重なっているわけですね。時代的にも重なっています。よく「文字」というものを「印刷」と当然のように分けて歴史的な段階みたいな形で議論することが多いんですが、実は

共通している部分がかなりある。「文字」として議論されている内容に「印刷」を前提にした議論がどうしても紛れ込んでしまうという事があったりするわけですね。

よく考えてみると、特に権力関係という視点から見えていくとこれらはそれぞれ次元がずれている気がするんですね。しかも実際はある時代をとってみればそれらは重層的な形で重なっている。「印刷メディア」というものが出てきたから手書きの文字というのがなくなるとか、ましてや「音声メディア」というのが重要性を失うということは無いし、「電子メディア」というものが出てきたから「印刷メディア」というものもなくなることもない。ただ、そういう重層的な関係、例えば「電子メディア」が出てきた時に「印刷メディア」とか「文字」とか「音声」の意味とか、そういういったものが重層的な関係の中でどう変わっていくかという問題は出てくると思うんですね。そこで次元の違いとか重層的な関係というものをどうしても視野に入れざるを得ない。だから何か歴史の流れで順番に「音声」「文字」「印刷」「電子メディア」というように考えているわけではないのです。それぞれが抱えている問題の次元というのは「電子メディア」が登場したからといってなくなるわけではない、という点も一応踏まえておきたいと思うんですね。

ただ、論文の中では触れていないけれども、背景として意識していた部分というのは、例えば「文字」のところについては一つは識字問題というのがあります。差別問題なんかとも関係していろいろと取り上げられることが多いんですけども。その関係で、非常に以前から関心があった部分で、それを「メディアと権力関係」という次元から捉えてみたかったのです。それから「出版・印刷」のところでは、印刷自体が資本主義的な関係に入っていくことで作られた空間でしてこれはアンダーソンが非常に鮮明に問題を提起して

いたと思うんですが、その部分について若干問題が残っている部分があるように思えまして、やはり「メディア論の視点からはそこはどう捉えるべきか」という点を、問題として取り上げたかったのですね。

最後の「電子メディア」のところは社会学の中でもまだ十分に議論し尽くされていないといえます。いろいろな議論が出ています。私自身はまだ「これはこうだ！」という枠組みとか結論が出せているわけではないので、できるだけ多様な考え方を紹介するというようにしています。こういう考え方にはこのような点で問題があると指摘する段階にまだとどまっている。本当はこの部分をもう少し展開したかった。それはこの論文を書いた後に一つの課題として残ったわけです。ただ、その後、何か具体的に展開したかということ一応最近ではデジタルイメージの問題に関心を持っていて、それとの関連で考えを進めているところではあるんですが、今のところまだ具体的な成果というものは出せていません。

5. レヴィ＝ストロースによる 文字の権力性の指摘

ということでもまず最初に「文字」の部分から簡単に説明を加えていきたいと思います。ここで言いたかったのは、まず「文字」というものにはメディアとしての側面と、ちょっと言葉として適当かどうか、誤解されると困るんですが、権力としての「文字」というか「文字」自体が権力性を帯びてしまうという側面とがある。この二重性が「文字」にはあるんだという点を出発点にしたいわけですね。ただ、歴史的な段階から言うと、一方でコミュニケーションメディアとしての「文字」が例えば対外的な交易関係から「文字」が発生したんだという考え方が一方にあります。これに対してそうじゃなくて非常に大きな古代の専制的な権力の形態、そこで広い領土を支配するのに「文字」が必要だったんだという見

解もあります。権力的な支配の道具として「文字」が生まれたんだという見解が他方にはあるわけですね。

私が以前、学生時代になりますけれどレヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』という書物に、これは研究論文というよりもエッセイだと思うんですが、非常に触発された経験があります。『親族の基本構造』といったレヴィ＝ストロースの本格的な著作とはまた別の意味で非常に触発される部分があるんですね。その中に「文字の教訓」という一節があります。そこでレヴィ＝ストロースは自分のフィールドワークでの体験を踏まえて「文字」の出現に付随するのは権力的な組織であると述べています。「文字」というものには必ず権力が伴っているというのです。

通常「文字」というものは知識とか情報を伝達するものだと考えられているけれどもそうではなくて、「文字」には権力を媒介項としてそういった知識とか情報といったアウトプットがあるんだという見解を述べているんです。これはレヴィ＝ストロースの構造主義というのがかなり議論された時期でもあったので、よく知られていたことではあったんですけども、ただ、「どうしてこういうような結論を引き出したのか、その根拠は何なのか」という点に非常に興味があって、『悲しき熱帯』だけじゃなくてかなりあれこれと文献をあさったりしました。要するにレヴィ＝ストロースの仮説の成否よりも「レヴィ＝ストロースはどのようなフィールドワークからこういう仮説を出したのか」という方がかえって面白いんですね。

レヴィ＝ストロースは南米、ブラジルのナンビクワラ族の調査をしていたんです。ナンビクワラ族にはもちろん文字は無いわけですね。ただ、様々なヨーロッパ人が来てからは交易関係というものが出来ている。彼らナンビクワラ族というのは季節によって移動していくんですね。レヴィ＝ストロースは何人か

の人と一緒にその移動についていった。ところが、移動していく時にレヴィ＝ストロースの一行は道に迷った。そこで道に迷って困惑している時に、夕方になってようやく発見されてナンビクワラ族の集まる場所に行った。その時にその首長がヨーロッパ人との交易で得たもの、何かガラス玉とか、もの自体はちやちなものだったようですけれども贈り物ですね。それと彼らの民具とを交換をするわけです。その時にレヴィ＝ストロースが観察すると、その首長は何か白い紙を読むような仕種をしている。「誰々にはこれ」とかいうことをしているわけです。レヴィ＝ストロースはこれを不思議に思って観察していた。その紙を見たらもちろん何も書かれていない。ナンビクワラ族には先に言いましたが、文字は無かったのです。

そこでこれはまさに「文字」についての一つの機能を示していると感じるわけです。それは「文字」が権力性を持っているんだということです。権力者である首長は、権力の道具として「文字」を使うことができる。ヨーロッパ人との交易の中からそれを学びとったのだという具合にレヴィ＝ストロースは解釈したのです。その体験をさらに様々なデータをつきあわせて議論を展開していきますが、要するに「文字」の出現の背後には必ず大きな専制的な権力というものがあるんだということです。「文字」というものは人間に知識をもたらしたのではなくて、権力を可能にした。権力の条件であって、専制的な権力が「文字」によってもたらされたからこそ発展的な知識というものも可能になったんだというような議論を展開したわけです。

6. 識字のなかの権力問題

むろんこのレヴィ＝ストロースの仮説はよく検討してみると疑問が次々に出てきます。その反論をしている時間はないので省略しますけれども、要するに「文字」というのは特

に手書き文字の段階ではある種の秘儀性がある、一部のみにしかわからないということがある。メディアとして使うならばできるだけ多くの人に自分の伝えたいメッセージ内容が伝わる必要があるはずですが、手書き文字というのはどうしても読める人が限定されますから秘儀性というものを伴ってしまう。それがあつた種のエリート主義に結びついたということは確かに言えるわけです。

レヴィ＝ストロースの仮説には確かにやや眉唾のところがあるんですが、「文字」が権力とストレートに結びつくものではないけれども「文字」というものが社会的次元に登場した時にいろんな側面を持ってくる。その時に権力性というものがある意味では無視できない部分としてあるんだというのがこの話のポイントです。そういったものをどう取り出していけば良いのかという問題が次に出てくる。これは社会学ではお得意の、いろんな類型を作っていくということです。最初は私もそういった類型を作ってみようかなと思っていたんですが、どうも単純に軸を作るとその類型を作るとかいう手続きでは収まらなくなったので「文字」のいろんな側面を説明する時に一つの便宜として、類型ではなくてそういった説明の為の道具としてこういう図を考えてみたわけです(資料2頁、「文字の社会的諸相」参照)。

つまり「文字」というものを社会的な次元で考える時には少なくともこういった側面を充分意識する必要があるんじゃないかと思えます。レヴィ＝ストロースが言ったのは、独占と普及、メディア性と権力性という形で分けた時にAのような独占と権力性という部分では確かに専制的な権力といった問題が出てくるということです。ただ「文字」の出現期でもBのような側面(独占とメディア性)が無かったわけでもないのですね。特定の商人に独占されてはいたけれども対外的な交易の中で生まれた文字というものもありました。ま

た暗号なんかもある意味でメディアが独占されていたわけです。その中でコミュニケーションの意図というものが明確に存在するという側面がある。

また、特に近代になって印刷術が発明されてから問題になってくるのは普及の側面ですね。これがCとかDという側面です。書物やジャーナリズムが浸透していくプロセスで、近代的な法律が整備され、それに伴って義務教育も普及していく。そうしたプロセスで識字というものが、どうしても権力のアリバイとして必要になってくるわけです。こうして識字というものが皆に目指されるようになる。

実際は四類型ではなくてもっと複雑なんですね。歴史的なプロセスを見ていくと、だから類型論は諦めて事態をもう少し論理的に追っていくという意味で、「文字」というフレームをどうとらえるかという点が問題になってくるわけですね。印刷術という一つの転換点メディアのレベルであったんですが、「文字」というものが秘儀的で独占されていた状態から逆転して、単に印刷術が発明されて文字が広がったというのではなくて、むしろ意図的にというか社会的にそういった方向が目指された時期というものがあるわけです。その転換点というものが「文字」というものを考える上で非常に重要性を帯びてきます。読み書きというものが身体技術として非常に規格化されていくプロセスがあるわけです。

それが監視と規格化というものと結びついて、フーコーなんか述べているところによると試験という形態が生まれてきた。むしろ試験自体は歴史的にはかなり古くからあったものですけれども、近代的な試験制度については単に何かどこまで学習が達成したかで選抜する為のものとしてではなくて、学ぶことそれ自体を組み込んでいく権力の技術として理解する必要があります。そういう中に位置づけていかないと識字という問題も捉えられないだろうと思います。ある人は試験という前提

があるからこそ、リテラシー（識字）というのは「学ぶことを学ぶ」ための技術となるのだという言い方をしています。

ある意味で「文字」と歴史的に連続して、その発展形態の様な形で印刷術、つまり「出版」というものが登場したわけです。もちろん印刷術自体はヨーロッパでグーテンベルグが発明する遙か以前に中国にありました。歴史的にはそう言われているんですね。ただ、その技術そのものが問題なのではなくて、ここではそういう出版・印刷の技術が資本主義と結びついたからこそ資本主義的な関係の中である非常に重要な情報空間というものが作り出されたのではないかという点が重要なんですね。これはアンダーソンが『想像の共同体』でまさしく真正面から取り上げている議論です。

7. 出版資本主義・想像の共同体・ナショナリズム

アンダーソンの議論というのはナショナリズムの問題と結びついてくる。その出版資本主義はナショナリズムというものをどんなふう形成していったのか。そのパラレルな関係というものを非常に鋭く突いた問題提起なのです。これは確かになるほどと思うんだけど、ただよく考えてみるとメディア論の視点からするとアンダーソンの問題の立て方とは違う、逆の問題の追求の仕方も必要なんじゃないかということアンダーソンの本を読んだ時に私は感じてはいたんですね。そこで、論文ではその点について非常に簡単に集約するような形で触れているわけです。

アンダーソンの場合、均質的な空間、出版資本主義という「出版」と「資本主義」の結びつきが決して必然的なものではなく、偶然結びついたと言っているんですが、いったん結びつくとその展開というものは均質的なものと宿命的なものを生み出した、それがまさにナショナリズムの想像力というものを用意

した、と論旨を展開していくわけです。ナショナリズムというものを考えていく時にたいへんシンボリックなものは「無名戦士の墓碑」であると言うのです。そこには死の二重性というものがあって、一方でお国の為死んだというのは偶然的で、宿命的で、死というものになら根拠というものはないんだというのです。その何故死んだかということについては答えられないはずですね。ところが他方で死そのものがある意味で必ず人間は死すべきものであるという意味で普遍的であり、かつ死ぬ事によって永続化するという側面も出てくるのであり、そのように死そのものがあらゆるものの根拠になっていくという二重性がある。それがまさにナショナリズムの想像力というものにつながっていくんだというのです。

ナショナリズムというものは根源においてそういったパラドックスを孕んでいるわけです。そういったナショナリズムの想像力を可能にしたものが出版資本主義であって、「出版」という形態が可能になると、それが資本主義と結びつくことによりある非常に具体的で個別的な次元からある均質的な空間というものへの移行が可能になったというのです。この具体的な例としては小説とか新聞があります。印刷が普及することで小説とか新聞という形態が可能になった。これは、例えば小説の中では様々なストーリーが展開するという事態でして、小説の中では異質な出来事が併存する。それは従来の伝統的な物語には存在しなかったような事態です。

同じ時期に起きているような出来事が併存して描かれるという事態が出版資本主義によって広範に行われるようになった。そういった形態が一層メディアとして徹底したのが新聞であって、新聞の中にはある同じ日に起きた出来事というのが、全く無関係の出来事として同じ紙面に並列されるわけですね。全く異質な出来事が共存している。一日だけ

共存するわけですね。アンダーソンの言葉によると新聞というのはそのような異質な出来事が共存する一日だけのベストセラーであるというよう言い方をしています。個別に、具体的に見ていくと異質なものであるにも関わらず共存するようなそういう空間ですね。そのためには具体的な個別性というものを取り去ることが必要になる。そういう個別性を脱色しない限りそういった空間というものは可能にならないわけです。こうして出版資本主義というものが土着的な共同体から切断された、想像の次元における普遍的で均質な空間というものを作り出したんだということになります。

ただ、それだけではナショナリズムというものは可能にならない。言語的な多様性という宿命が他方にあります。アンダーソンの議論では普遍的でありながら特異性を持つ出版語というものが必要になってきたんだとされています。ラテン語と口語、俗語の中間にそういう出版語というのが生まれてくる。現在のフランス語とかドイツ語とかはそういったイメージだろうと思うんですけども。近代国家日本において明治の初期に行われた標準語の形成や言文一致運動なんかがまさにこれにあたるでしょう。それらは出版語をつくりだすヨーロッパでの動きとパラレルなものだったと思うんですね。

ここの分析の方向性については若干異論もあります。メディア論の視点から言うところといった出版資本主義が作り出したそのような普遍的で均質な空間がある宿命性の中に置かれるという事態を考えた時、権力関係という視点からはこれを集団的な主体化という装置として捉える事が出来るのではないかと思います。そこには、あのフーコーがパノプティコンという権力の装置を取り上げて議論していたところの、あの可視性つまり見える事と不可視性つまり見えない事とが不均衡な形で配分される仕掛けがあるということになりま

す。まさに出版資本主義というのはそういったものを持っていたのではないかと考えられるわけです。集団的な形でそれを可能にした装置として出版資本主義を捉えることが出来るのではないかと思うのです。これについても本当はいろいろと脇道に入った細かい議論があるんですが、これは論文にも書いていませんし、今後議論したいところなんで今日はちょっと時間の関係で省略します。

8. 超パノプティコンとしてのデータベース

次に「電子メディア」の問題ですね。実はここは先程も言いましたようにまだ社会学の中でもあまり突っ込んで議論されていないんですね。確かに近代的な権力の形態についてはかなり具体的な焦点を結んだ形で議論が展開されてきた。つまり権力論というのは近代的な権力というものを前提に進められてきたと思われるんですね。ところが「電子メディア」というものと権力の関係というものを考えた時にはメディアの変容と同時にもう一つの変数である権力の方の変容も同時に考えていかなければならないだろうと思います。同じように権力という言葉を使っても権力もたらす効果というものはかなり以前とは違って来るはずであるということです。

ですから同じイメージで権力というものを捉えることは出来ないし、逆に「電子メディア」というものから権力の変容というものを推測していくことも可能であるわけです。その場合、いろいろな展開の仕方はあるんですが、この論文では次の様な方向で考えてみたわけですね。「文字」から「出版」というメディアについて一つの軸としてパノプティコンのモデルというものを前提にして議論を展開しています。そのパノプティコンとの関係で「電子メディア」を見た場合に、パノプティコンのモデル自体がどういう形で変容していくのかと問題を立ててみたらどうかと考えまし

た。その場合にパノプティコンというのは何なのか、パノプティコンにはどういう機能なり効果があったのかということをも改めて分析してみる。パノプティコンが何故権力の装置なのか、という点に関してはいろいろな分析があるんですが、一つは次のような捉え方が可能だと思うんですね。

パノプティコンというのはジェレミー・ベンサムという人が考案した理想的な監獄のシステムなんですね。中央監視塔というのがあって、そこから独房というものを見るようなそういう仕組みになっていまして、逆に中央監視塔に誰かがいて観察しているのを独房の方からは見ることはできない。そういう仕組みです。つまり「見られずに見る」というそういう視線の非対称性というものを物質化させるような建築物であったとフーコーは説明しています。実際には全くこのモデル通り造られた監獄というのはなくて、現実化しなかったそうですけれども、ただこのパノプティコンはモデルとしては様々な所に適用されます。例えば、軍隊とか病院とか学校とか。そうした場所にもパノプティコンのモデルというものが応用されていったとフーコーは述べています。

ではそこで何が権力の機能であり権力の効果であるのかという点を考えてみると、一つはこう考えることが出来ると思うんですね。つまり中央監視塔というものはそこで誰が監視しているか見えないからこそ独房の中にいる囚人は「いつ見られているかも知れない」という意識を内面化させていく、その中央監視塔というものが体現する抽象的な視線の機能として、見ているか見ていないかわからないために「何時でも見られている」という可能性があるということです。その場合、見られているかも知れないという事態をそこで見ることで、情報というものを収集し蓄積しているんだと捉えてみたらどうかという考え方があるんですね。

実はこうした考え方で「電子メディア」を捉えようとした人がマーク・ポスターです。『情報様式論』という本でポスターはパノプティコンのモデルをそういう観点から捉えています。そう考えていくとコンピュータのデータベースというのはまさに中央監視塔の役割を果たしている。情報を収集し蓄積している、しかも自動的にそういった機能を果たしていくというわけです。そういう意味ではデータベースは非常に完全なパノプティコンのモデルです。これをパノプティコンのモデルの完成体であるという意味で彼は「超パノプティコン」と呼んでいます。この「電子メディア」についてポスターは一方で自分の捉え方と対立する見解として、コンピュータのネットワーク性のようなものを重視して、様々なネットワークを広げることでその可能性、個人の可能性、自由というものを広げるという意味でそれを自由のテクノロジーであるとする議論を紹介しているのですが、ちょうどそれと対立する形で「超パノプティコン」という考え方を出しているんですね。ただこの二つの見方は私の見るところでは共に両極端の見解でして、むしろ「超パノプティコン」にしろ「自由のテクノロジー」にしろどちらの要素もあるとは思いますが、実際はそう簡単にどちらかに決着がつく問題ではないのではないかと思います。

またこの議論に関連して非常に面白い議論を展開しているのは、大澤真幸さんの『電子メディア論』『性愛と資本主義』です。彼は「超パノプティコン」というのはパノプティコンモデルの権力の完成形態であると捉えた上で、従来パノプティコンのモデルが権力として機能したのはそれが完成された形態ではなくて、不完全だったからだと言うのです。不完全であるからこそ、そういった完全な規範的なモデルというものを目指して、というかそういうものを駆動力として権力の効果というものが生み出されて来た。だから、パノプ

ティコンというものが権力のモデルとして可能になるのはそれが現実には不可能であったからだという非常に逆説的な論理を展開しています。それを適用していくと「超パノプティコン」というのは権力の完成形態であるから、それは同時にそういうパノプティコン型の権力というものは、データベースを超パノプティコンと捉えた時に「そういった権力の形態というものは消滅するはずである」とする議論になるんですね。

この議論は社会学のマックス・ウェーバーのカルヴィニズムと資本主義の関係についての議論とよく似ています。カルヴァン主義というものはあくまで宗教であってその神の絶対性、超越性というものを徹底していった時にそれは世俗内禁欲という倫理を作り出していく。それが資本主義の精神につながっていきます。

重要なことはいったん資本主義というものが可能になっていった時に、つまり本来、世俗内禁欲の倫理を作り出していった神という規範を完全に現実化していった時には、神というものの自体が消滅せざるを得ないということです。資本主義が現実化したところでは神というのはもう不必要な存在になってしまう、それが近代化のプロセスであったということです。それとパラレルな事態が「電子メディア」についても起こるはずであるという理屈になる。大澤さんの読み方からするとそうなるんだろうと思うんです。

9. パノプティコン型の権力の行方

そうするとこれからの実践の方向というか実際の現実化の方向はそういった「超パノプティコン」というものを目指すべきだと——そこまでは言っていませんけれども——そういった議論につながっていくと思うんですね。それと大澤さんとかポスターの議論に関連して、パノプティコンについてはそういった個人の主体性というものが同時に従属の形

式でもあるという形を作り出して来た点に注意しなければならない。パノプティコン型の権力においては、主体性と従属性というものがミックスされた形で権力の関係を維持してきたという論点です。

ところがデータベースを「超パノプティコン」として見た時にはそれはどうなるのかという点はまだ十分に議論されていないんですね。つまりメディアの変容がどのような権力の変容をもたらすのかという点についてはあまりポスターは議論していないし、大澤さんも従来のパノプティコン型の権力の効果はなくなる、個人を主体化すると同時に従属化していくような権力形式はなくなって別のタイプの権力の形態になるんだということは言っているんですが、具体的にそれが何なのかははっきり述べていない。

次にもう一つの分析の視点はパノプティコンというものを、見られずに見るという不均衡な視線の非対称性の問題として捉えるのではなくて、要するに「見る—見られる」という一対の関係が、見る事と見られる事とを装置の仕組みの中で機械的に切り離すという様な仕組みを作ったのがパノプティコンであると考えことです。そうするとパノプティコンの前提には「見る—見られる」という一対の関係が必ず存在しないとイケないことになる。つまり視線というものが必ず二つの対立する関係の中で登場することになります。そうすると視線の二項対立というものが果たしてどれほど実体的な意味を持つといえるのか。もし「電子メディア」の中でそうした存立基盤が失われていくのだとすれば、これは明らかにパノプティコンのモデルが妥当しない、或いは変容していかざるを得ないことになります。

10. ポートリヤールのハイパーリアル論

パノプティコン型の権力の行方について、

消費社会論の中での議論もあります。ボードリヤールが取り上げているんですが、アメリカで20年くらい前だと思うんですが、「テレビ=ヴェリテ」という試みがあったのですね。詳しい内容は論文にも少し紹介しましたが、長期に渡る密着取材を行うことをずっとある家庭について実施しまして、その家庭の日常的な出来事を半年だったか一年だったかそういう形で追跡していったわけです。その家庭の様々な出来事が全米に放映されるんです。そういった家庭の状況をテレビのドキュメンタリーという形で同時進行で映し出すんですね。ところが最後に家庭が崩壊してその夫婦は離婚してしまうんですが、この点について現実の出来事とメディアの関係というものが当時問題になりました。そこでは一方でメディアが家庭の中に入り込んだために家族の中の関係がギクシャクしてきて離婚してしまったんだ、家族が崩壊してしまったんだと言う人が現れました。他方でテレビのディレクターは家族が離婚するところまで徹底して原因まで探れた事をメディアの勝利の様な形で位置づけていました。しかし、問題はそれほど単純ではなかったんです。

メディア側の言い分は我々がそこにいなくてもドキュメンタリーに映し出されたことは進行したんだというものです。普通はドキュメンタリーはメディアによって隠された真実というものを発見していくと考えることが多い。パノプティコン型のモデルが前提にしているものも——これはフーコーが『監獄の誕生』ではなくてその後のセクシャリティーについての分析の中で述べているんですが——キリスト教の中での懺悔とか告白とか、そういった儀式がある種の権力的な関係と結びついているんだと分析しています。

告白の際には何か事実を告白するだけでなく、自分が何を考えていたのかということも告白しなければならない。懺悔する時には単にこういう悪事をしましたというだけでは

なくて、どういう邪な意識を持ったか、女性を見て悪い連想をしたとか、そういった点までも全部言わなければいけない。その時に何を考えたか、或いは意識していなかった無意識の部分まで含めて洗いざらい心の中の邪悪さといったものを探っていく。それがまさに告白という手続きを通じてなされると「真実はそこにあるんだ」「隠された部分にそれはあるんだ」となっていく。そういう枠組みが出来てきたんだとフーコーは言いましたが、しかし「テレビ=ヴェリテ」ではそういう枠組みが隠された真実を暴露するという枠組みが崩れているんだというのがボードリヤールの分析なんです。そこではメディアが、ボードリヤールの言うハイパーリアルという事態になっている。人工的ではあるんだけれども自然よりも本物らしい、まさにそれが本物のようであるというハイパーリアルがそこで実現されているからこそ、「テレビ=ヴェリテ」の視点というのはパノプティコンの終わりであるということになるわけです。

11. 「送り手と受け手」図式の失効

これがさらにもう少し進み、マスメディアの中だけではなくて具体的な社会領域の中でそれが一般化していく様になると、もはやパノプティコン型の権力形態というのは全く妥当なくなってくる。では、どうなるのかとなるとボードリヤールの権力のイメージというのは非常に曖昧なんですね。円環する権力のイメージという非常にシンボリックな権力の姿を考えているようです。「送り手と受け手」の構造的分離という従来のマスメディア論で前提となってきた図式が不確定なものになってきたというか、それ自体があまり意味を持たなくなってきたというのです。

これは必ずしも「電子メディア」の中での送り手と受け手の双方向性とか、そういった問題ではないと思います。むしろ社会領域の方から捉えた時に「誰が送り手で、誰が受け

手であるか」という問題自体がそれ程重要ではなく、なっているという指摘なんだろうと思うんです。そうなってくるとメディア・コミュニケーションが前提としてきた距離というのが無意味化していくことになります。ボードリヤールの論理を進めていくとそういうことになる。そうすると権力のエコノミーというかどの様な効果を生み出していくかというところで転換が生ずるはずで、その辺はボードリヤールも具体的には展開していません。

最初にお話した文部省科学研究費の重点領域研究で議論されてきたことはまさに今述べたような問題だったといえます。例えばハイビジョンのようなメディア技術の発展を考えると、例えば「精細度」というものを上げていくと表現していましたが、画像が非常に精密なものになっていく。そのようなメディアの高度化というものをどのように位置づけるのかということです。それは迫真性とかリアリティーというものを高めると一般に思われているけれども、どうもそれだけじゃないんじゃないか。むしろそういった従来の日常的なリアリティーというものを逆に崩していったら改めて再編成するんだろうと思われるのですが、そういったある種の転換をもたらしていくはずだという論点につながってくると思うんですね。このあたりもどうもまだ結論がはっきりしないというか今後、課題とすべき問題です。

12. おわりに

今回の論文の今後の展開というか、書き残したものの一つとしてあるのは、「文字」とか「印刷」とか「電子メディア」とか、これらは単に、最初に申しましたように歴史的な展開なのではなくて重層的な関係でもあるということですが、そういった場合、一つの権力の場というような形で捉えた時にテーマとして浮かび上がってくるものとして「メディア・イベント」という問題がある。これは最近メ

ディア・イベント論というものがかなり議論されているんですが、ただそれだけではなくて、文化人類学的図式を適用した時にはかなり古典的なのというか、むしろ「文字」というメディアの場合に妥当するような議論がそのまま「電子メディア」のレベルに適用され、或いは「音声メディア」というか「文字」以前の象徴的な関係というものを「電子メディア」によるメディア・イベントの議論にそのまま適用している場合があったりする。

むしろメディア・イベントというものが権力の象徴的な場をどう形成したのか、メディアの変容がどんな形で進展してきたのかという視点が必要になります。つまりメディア・イベントというものが問題になったのは恐らく20世紀になってからだと思うのですが、メディアの変容に伴ってさまざまなメディア・イベントが作り出されてきた。それを権力の関係という水準で捉えてみる。権力の場そのものをその権力の関係というものをそこで分析するという事が非常に重要なテーマになってくるだろうというのが積み残された大きな問題の一つです。

ということで権力それ自体の問題は別のところできちんと議論しなきゃいけないんですが、それは今回の岩波講座の別の巻で取り上げました。「メディアと権力」という問題は、今後、社会理論とか或いは文化社会学と最近呼ばれているような領域で多くの議論を積み重ねなければならない。今日の話の聞いただけでは漠然として捉えどころがないように見えるかも知れませんが、こういった議論を積み重ねていくことで、例えば「電子メディア」の問題への或る一定の社会的なアプローチが可能になっていくのではと考えている次第です。脱線した部分もありましたが、一応、報告としてはこれで締めくりたいと思います。

資料

メディアと権力 — その内在的関係をめぐって —

亘 明志

〔『メディアと情報化の社会学』「メディアと権力」の構成〕

- I メディアの枠組と権力関係
 - 1 古典的な問題設定と権力関係
 - 2 ニュース・メディアの枠組と駆引き
 - 3 メディアの枠組と権力関係
- II リテラシーと権力の装置
 - 1 メディアとしての文字／権力としての文字
 - 2 文字の社会的諸相
 - 3 文字という枠組
- III 出版資本主義と集団的主体化の装置
 - 1 ナショナリズムと死の複製
 - 2 均質性と宿命性 — 集団的主体化の装置
- IV 電子メディアと権力の変容
 - 1 データベースと超パノプティコン
 - 2 電子メディアとパノプティコンの行方

I メディアの枠組と権力関係

1 古典的な問題設定とその変容

- (1) 「メディアと権力」という問題設定の多義性
 - ①メディアに対する権力 ⇨ メディア vs. 権力 (≒国家権力)
 - ②メディアにおける権力
 - (a)社会的権力としてのマスメディア ⇨ 第四の権力
 - (b)メディアに内在する権力の関係
 - ⇨ メディア (の変容) は個人にどのような力を及ぼすか
 - 個人はメディアによって何をなしているか
- (2) フーコーの微分的な権力概念とメディア
 - ⇨ メディアがどのように権力の過程に組み込まれているか
 - メディアにおいて権力がどのように行使されているのか

2 ニュース・メディアの枠組と駆引き

タッチマン『ニュース社会学』

⇒ 送り手としてのマス・メディアのエスノメソドロロジー的研究

3 メディアの枠組と権力関係

ゴッフマン「枠組分析（フレーム・アナリシス）」

メディア ↔ 枠組（フレーム） ↔ 権力関係

II リテラシーと権力の装置

1 メディアとしての文字／権力としての文字

(1) 文字 ⇒ コミュニケーション・メディアとしての文字

権力的支配の道具としての文字

※ レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』

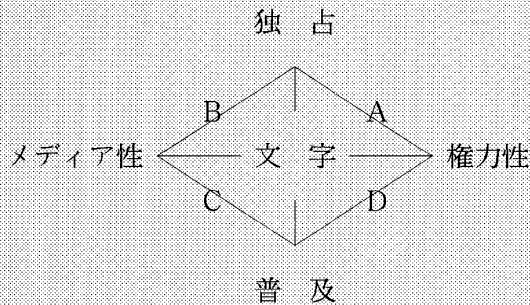
⇒ 「文字の教訓」

「文字の出現に付随するのは権力的組織」？

「文字→権力→知識」

(2) 文字の秘儀性とエリート主義

2 文字の社会的諸相



〔メディア性／権力性／独占／普及〕

A： 文字出現期における専制的権力

B： 特定商人による対外的交易の独占，暗号

C： 印刷を通しての書物やジャーナリズムの浸透

D： 義務教育と識字

(A, D)： 文字の独占と普及を通しての権力的関係の再生産

(A, C)： 独占的、権力的な文字とメディアとして普及する文字との対立

(C, D)： 文字が普及する場合の権力性とメディア性

→ 読み書きの身体技術

3 文字という枠組

身体技術としてのリテラシー（読み書き）

+

監視と規格化

↓

試験という権力の技術 ⇨ リテラシー＝「学ぶことを学ぶ」技術

cf. 差別問題としての識字

III 出版資本主義と集団的主体化の装置

1 ナショナリズムと死の複製

無名戦士の墓碑 ⇨ 死の二重性

偶然的・宿命的・無根拠／普遍的・永続的・根拠

↓

ナショナリズムの想像力

ナショナリズムのパラドックス

2 均質性と宿命性 — 集団的主体化の装置

ネーション = 想像の政治的共同体

資本主義と印刷術 ⇨ 出版資本主義

小説・新聞 ⇨ 異質な出来事の共存

「一日だけのベストセラー」

↓

土着的な共同体から切断された想像の次元における普遍的で均質な空間

↓しかし

言語的多様性という宿命

⇨ 普遍的でありながら特異性をもつ出版語

「ラテン語の下位、口語俗語の上位」

cf. 日本における標準語と言文一致

↓

集団的主体化の装置 ← 可視性と不可視性の不均衡な仕掛け

(cf. パノプティコン)

IV 電子メディアと権力の変容

1 データベースと超パノプティコン

(1) 権力のパノプティコン・モデル

⇒ 「見られずに見る」という視線の非対称性を物質化させる建築物
 中央監視塔が体現する抽象化された視線の機能
 ⇨ 情報の収集・蓄積

↓

コンピュータのデータベース ⇨ 超パノプティコン

※ 電子メディア化は、「自由のテクノロジー」か「超パノプティコン」か

※ 超パノプティコンは、権力の完成形態か権力の消滅か

cf. 大澤真幸『電子メディア論』『性愛と資本主義』

(2) データベースの言説が構築する個人（ポスター『情報様式論』）

※ デジタル・イメージは、監視のテクノロジーを変容させるか

2 電子メディアとパノプティコンの行方

「見る＝見られる」という一対の関係がパノプティコンの前提

⇒ 視線の二項対立が意味をもたなくなれば存立基盤を失う

↓

アメリカにおける「テレビ＝ヴェリテ」の試み

↓

「自然よりも本物らしい」というハイパーリアルの逆説

「まるでわれわれがそこにいなかったかのように」

「隠された真実」というものがない

∴ テレビの眼はパノプティコンの終わり

電子メディアに適合的な権力の形態はどのようなものか

円環する権力のイメージ（ポトリヤール）

↓

送り手／受け手の対立が不確定で曖昧になる

↓

視線の技術であるパノプティコンが前提としていた距離の無意味化

↓

権力のエコノミーの転換

⇒ ハイビジョンなどの情報の「精細度」の高度化をどのように位置づけるか

〔補足〕メディア・イベントと権力の場

⇒ メディア・イベントは権力の象徴的な場をどのようにして形成したか

メディア変容は、どのようなメディア・イベントをつくり出し、そこにおける
 権力の関係をどのように変容させたか